

読書通信



No. 212

① アベノミクスの「三本の矢」は実は0勝3敗だったのではないか。日銀に延々とゼロ金利政策を続けさせ公的債務に対する歯止めをなくした罪と罰だけでも十分に重い。と思っていたところへ河野龍太郎『成長の臨界』（慶應義塾大学出版会、2750円）を頂戴した。500ページの大著のためもあり読み始めるのが遅くなったが、期待を裏切らぬ力作だった。

第1にテクニカルな経済分析にとどまらず思想的・歴史的に深く掘り下げられている。第2に金融・財政論にページが割かれるのはもとよ

りとしてグローバルゼーション、分配論、雇用システム、ICT革命、企業論、環境問題、果てはコモンスからコミュニティへと驚くほど思索は広がり読み応え十分だ。第3に社会科学の統合的アプローチが主張されていて説得力に富む。とはいえやはり現下の金融政策批判、公的債務膨張の追及は圧巻で、消費税の小刻み引き上げなど傾聴に値する具体案が展開される。

② 上野千鶴子さんの『在宅ひとり死のススメ』のせいか自宅でぼっくり死にたいという友人が増えている気がする。筆者も昔、両親を自宅で看取り、今は自分もそうありたいと思うことしきりである。だが小島美里『あなたはどこで死にたいですか？』（岩波書店、2310円）を読んで考えさせられた。著者は永年、介護に関

わってきたプロで、登場する老人たちの事例は介護する側、される側、いやはや大変である。

③ というのも歳をとると認知症の比率が劇的に高まるからだ。介護サービスを受ければいいではないかと思いがちだが、ことはそう簡単にはいかない。介護保険は認知症患者には使い勝手がまことに悪いのだという。著者は、厚労省の責任を含め現状を厳しく追及するとともに、介護制度をどう改善したらいいか提言している。これは高齢者だけの問題ではない。介護側の中年世代にとっても貴重な内容にあふれている。

③ 戦時下とはスローガンの時代であり、プロパガンダに国民が踊らされる世でもある。貴志俊彦『帝国日本のプロパガンダ』（中公新書、924円）は戦時にどんな政治宣伝が行われて

きたかを子細に追っている。類書は多いが、日清、日露までさかのぼっているうえ台湾の霧社事件まで詳述しているのは異色だ。誇張誇大は宣伝戦の常にしても、つけを払わされるのは指導者、国民双方であることがよくわかる。

④ 夏川草介『レッドゾーン』（小学館、1650円）は現役医師による医療小説で、舞台は呼吸器内科医もいない長野県の小さな病院。院長（やや影が薄い）の決断でコロナ患者を受け入れることになり、専門外の医師たちの肉体的精神的疲労は極限に達する。第一波当時の「未知の感染症」への人々の不安と医療現場の混乱を描いて興味深いが、県内の病院はすべて未知の病におびえて知らぬふりを決め込んだという設定（事実らしい）には考えさせられた。（浅野 純次）